

入試年度	2025 年度	入試時期	I 期入学試験	実施日	2024 年 9 月 27 日
課程	博士前期課程	研究科	国際日本学研究科	専攻・コース	国際日本学専攻 英語教育学研究領域
入試方式	一般入学試験/ 外国人留学生入学試験		試験科目	専門科目	

「出題の意図」および「解答」または「解答例」

【出題の意図】

本研究領域の入試では、英語教育学研究における基礎的な知識、特に第二言語習得、学習者要因、授業実践、教材・指導法などに関する主要な概念や理論を正確に理解しているか、また、それらを教育実践と関連づけて、論理的かつ批判的に自らの見解を述べることができるかどうかを評価します。

【解答例（採点時の観点）】

多様な回答が考えられ、その全てを示すことは分量が膨大になりすぎ、また一部のみを示すことは出題の趣旨をかえって誤って理解させるものとなるため、

一意の解答例は公表を避ける代わりに、キーワードや採点時に重視した観点を解説する。

I. 論述問題

(1) 第二言語習得のプロセスにおいて、「気づき」がどのような役割を果たすかを説明しなさい。また、教室内の指導で学習者の「気づき」を促すには、どのような工夫が必要かを論述しなさい。

- ・「気づき」を第二言語習得の中で理論的に位置づけて説明できている。
- ・Schmidt や Gass などの代表的理論に触れつつ、インプット・認知プロセス・アウトプットの関連を論じている。
- ・教室内で「気づき」を促す工夫が具体例（例：input enhancement, task repetition, recast）とともに示されている。

(2) 英語教育において育成すべきコミュニケーション能力について考察し、その具体的な育成方法を提案してください。なお、コミュニケーション能力に関する特定の理論や枠組みを基にした実践的な活動や教材開発を含めるようにしてください。

- ・コミュニケーション能力を多面的に定義できている。
- ・Canale & Swain, Bachman, CEFR など、代表的な枠組みを適切に用いている。
- ・具体的なコミュニケーション活動（例：インフォメーション・ギャップ活動、問題解決活動、意見交換活動）を挙げながら、それらを理論と関連づけながら論じている。

II. 解説問題

(1) アウトプット仮説

- ・Swain による理論であることが示されている。
- ・アウトプットの主要な役割（例：自らの第二言語能力の「穴」に気づく、自らの中間言語に関する仮説検証の機会が生まれる、言語知識の自動化を促進する）について説明されている。
- ・教育実践との関連について触れられている。

(2) 相互行為能力

- ・相互行為能力を他者と共同構築される能力として説明できている。
- ・ターンテイキング、あいづち、聞き返しなど、相互行為を構成する具体例について述べられている。
- ・教育実践との関連について触れられている。

(3) メタ動機づけ

- ・動機づけとメタ動機づけの違いが示されている。
- ・メタ動機づけの主要な役割（例：自らのやる気の状態を客観的に捉え、必要に応じて自己調整する）について説明されている。
- ・教育実践との関連について触れられている。

(4) トランスランゲージング

- ・トランスランゲージングをコードスイッチングとは異なる概念として説明できている。
- ・トランスランゲージングの具体例（例：英語の語句や表現の意味を、日本語知識と結び付けて理解する）や英語教育における意義が述べられている。
- ・教育実践との関連について触れられている。

合否判定の方法及び基準

入学試験は国際日本学研究科のアドミッションポリシーに基づき、これを満たす学生を募集することを目的に実施しています。

合否判定については、本研究科のアドミッションポリシーを満たすことを、総合的な視点により合否を判断しております。